



『トクシマ・アンツアイガー』

第 13 号

徳島 1915 年 6 月 27 日

先週の戦況

「勇気、献身、不屈は、一国民の自立のための支柱である。—これらのものに感じてわれわれの胸がもはやときめかないなら、たとえ偉大な勝利への途上にあるとしても、もう救いようがない。」

シャルンホルスト¹

わが軍は、諸国民のこの巨大な闘争の中で上に挙げた三つの特質を大いに示しており、そのため世界大戦がわれわれにとってよい結末を迎えることは疑えないし、また疑うべきでもない。われわれは、数の上ではるかに優勢な敵に対していたるところで防衛に成功したのみならず、世界の歴史がこれまで記したことのないほどの勝利を得た。

ここ数週間次々に朗報がもたらされたが、その中でも特にガリツィアに

1 Gerhard Johann David von Scharnhorst (1755-1813) ナポレオン戦争のときのプロイセンの将軍で、軍の改革をおこなった。

おける途方もない戦果に、われわれは最大の関心を寄せた。

戦争のこの方面における作戦行動は、おそらくどんな楽観主義者でも期待できなかったような驚くほど急速な進展を見た。

フォン・マッケンゼン大將は、レンベルクに達している。カルパート山脈のすべての峠道を、ロシア軍は放棄した。南方からも、ドイツとオーストリアの軍勢が同様にレンベルクに向かって進軍している。わが軍の最右翼にあるブコヴィナで、ロシア軍は勝利を得ようとしていたが、ここでもわが軍は前進した。ロシア軍が最後の一兵にいたるまでオーストリア領を去ることになるのも、もう時間の問題にすぎないように思える。

ガリツィアでの大勝利は、これまで 42 万の捕虜をもたらしている。砲その他の武器や戦争物資の鹵獲について当所で得られた情報は、今のところ不完全なものでしかないが、敵の急速な退却のため、わが軍の戦利品は膨大なものであるにちがいない。特にこれ以上の砲の損失は、ロシア軍にとって致命的となるかもしれない。

これらの出来事によって、ここ数週間に祖国で起こった他のすべてのことは目立たないものとなった。この間、ポーランドとクールラントにおいても同様に戦闘がおこなわれていたが、おそらくそこからガリツィアへの敵部隊の移動を妨げるためである。最新の情報によれば、1,100 キロメートルにおよぶ全ロシア戦線で、わが軍は攻勢に転じたようである。『毎日新聞』は、ワルシャワ付近でのわが軍の大勝利をすでに報じているが、このニュースはまだ確認されていない。

もちろん英仏軍などは、攻勢の続行によって、諸部隊を東部から西部に移すことをわれわれに強いて、ロシア軍の負担を減らそうとした。しかし、敵のこのもくろみは、わが軍の賛嘆すべき堅守によって挫折した。ほとんどすべての戦場において、敵軍は尋常ならざる損害をこうむって撃退された。フランス軍は、アラスで戦果を勝ち取ろうとしたが、わが総司令部はそのような結果については何も報じていないので、わが方がここで陣地を

守り通したと考えてよいだろう。ゼンハイム北方のヴァスゲンヴァルト²で、フランス軍は若干前進した。

イーブル付近ではわが軍が前進した。オランダの新聞は、フランドルにおけるドイツ軍部隊の集結を報じている。この報道が正しければ、イーブルへの新たな攻撃が予想できるだろう。

ドイツとフランスの報道によれば、今やヴェルダンもわが軍の長距離砲によって砲撃されているが、その規模や成果については残念ながら報じられていない。

イタリア国境では、これまで以上の大規模な衝突はまだ起こっていない。

ダーダネルスへの上陸作戦において、敵はきわめて甚大な損失をこうむった模様である。彼らはそれ以前もずっと、さかんな攻撃にもかかわらず、味方の軍艦の重砲による掩護の射程外には前進できていなかった。軍艦の重大な損失ののち、英仏艦隊は退避したが、この後退には即座に陸上部隊も続いた。艦砲の掩護なしでは、陸上部隊はトルコ軍の攻撃に耐えられなかったからである。特に大きかったのはフランス軍の損害であった。イタリアが、同盟している諸国のガリポリでの厳しい経験からして、ダーダネルスの戦鬪に部隊を提供する意欲を示すかどうかは、非常に疑わしいと言わねばならない。

ブルガリアからの情報によれば、トルコ軍がコーカサスで大規模な攻勢に出ようとしているようだ。これによって、特にロシアの油田地帯が危険にさらされるだろうが、それは、いずれにせよすでに石炭不足が蔓延しているロシアにとって、非常に悪い結果をもたらすかもしれない。というのも、機関車などの大部分は石油によって暖房がなされているので、鉄道の運行やそれとともに補給もいっそう困難なものとなるからである。

われわれのUボートは、その間静かに仕事を続けており、「ルシタニア号」撃沈によって惹き起こされたセンセーションによっても活動を妨げら

2 ヴァスゲンヴァルト (Wasgenwald) は、ヴォゲーゼン (Vogesen) とも呼ばれ、現在フランス領のアルザスにあるヴォージュ山脈のこと。

れていない。

ツェッペリン飛行船隊は、幾度もイギリスに行き、ロンドンにもはじめて現れた。どれほどの被害を与えたかは、残念ながらわからない。これについてはイギリスの通信社が沈黙を守り通しているからだ。

以上のようなわけで、わが軍は依然として攻勢にあり、肝心なのは、部分的に成果を、それどころか赫々たる戦果を収めているということだ。わが軍の勇気、献身、不屈と天才的な指揮官たちのおかげで、われわれは信頼の念に満ちて未来を展望することができる。

日本の歴史（12）

関が原における勝利によって、家康はこの国の主人となった。天皇は1603年に、事実上の政権樹立を承認して彼を将軍に任命した。家康は、秀吉のように冒険的な外征に国力を浪費することを避けた。彼はむしろ、適切な封建体制の整備によって、将軍の地位の強化と徳川家の権力の安定に努め、これによって将軍の位を徳川家にずっと確保しようとした。家康は、首府を今日の東京である江戸に移し、天皇との関係は次のように固定された。すなわち将軍は、天皇の名において行使される完全な政治権力を付与され、一方天皇は、神聖な存在として隔離され、単に称号の上での主権者にとどまることとなった。

1605年、家康は息子の秀忠のために退き、彼を将軍にした。1614年、家康は今一度軍を起こし、彼にとって危険すぎる敵と思われた秀頼（秀吉の子）を滅ぼそうとした。かなり長期の戦いののち、難攻を誇った大阪の城砦はようやく落とされ、秀頼は城の一部が炎上したときに死んだ（1615年）。

家康は、近隣諸国との貿易をあらゆる方法で支援した。朝鮮との関係は非常に友好的なものとなった。中国はたしかに拒絶的な態度をとったが、ともかく日本との貿易はきわめて活発になった。それまでは、ポルトガル

人とスペイン人だけが日本にいるヨーロッパ人であった。1600年に、一艘のオランダ船が日本に流れ着いた。その乗組員のうちから、家康はイギリス人アダムスとオランダ人フォスター³を、助言者として宮廷にとどめおいた。アダムスは、ヨーロッパの手本になった造船術を日本人に教えた。

これによってマカオ、安南〔ヴェトナム〕、ジャワ、フィリピン、インドとの定期航路が開かれた。それどころか、まもなく日本の航海者は、太平洋を横断すらした。オランダ人は、1609年に平戸島に貿易のための居留地を設置する許可を得、1613年にはイギリスもこれに続いた。しかしイギリスの居留地は、利益を上げることができなかったので数年後放棄された。

つづく

ハラキリ (2)

ハラキリの第二の方法は、今なお侍たちにしばしば見られるものである。彼らは、名誉にかかわる問題に巻き込まれると、腹を掻き切ったのち、なおみずからの手でのどを切るという仕方で自分の命を絶つのであり、しかも他人の助けを借りない。こうして男らしい勇気による沈着さをしっかりと証明するのである。

この自殺の仕方は、日本ではきわめて賞賛すべきものとされている。本人も、彼を英雄のごとく讃えるあまり悲しみを忘れてしまう家族も、みずからの名誉に身を捧げたのであり、今やどんなに小さな汚点も消え去ったのである。ハラキリのさまざまな規則に通じていることは、日本では礼儀作法の一部なのである。

1890年に、日本の議会においてハラキリ廃止の提案が取り上げられたが、この提案は非常に激しい反対にあった。演説者の大部分はこの野蛮な

3 不明。通常はヤン＝ヨーステン・ファン・ローデンスタインとされている。

風習を弁護した。この風習は「根本的な忠誠の体現」と呼ばれ、官人に対する共感にもとづいて「国の誉れ」「国体の支柱」「尊重すべき慣習」と呼ばれ、また「宗教の基礎であり美德を促進するもの」と呼ばれた。廃止提案者はその後しばらくして闇討ちにあって殺された⁴。

このことからわかるのは、この特異な風習が、日本人の人生観といかに深く絡み合っているかということである。ハラキリを完全に廃止することは、そんなにすぐにはできないであろう。

完

コンスタンティノーブルにおける「エムデン」乗組員

コンスタンティノーブル 5月29日

今日の午後、フォン・ミュッケ大尉に率いられてここに着いた「エムデン」乗組員の生き残りの英雄たちは、非常に熱狂的な歓迎を受けた。駅はドイツとトルコの旗でいっぱいに飾られ、港にいるすべての汽船にも旗が掲げられた。この船乗りたちは、駅で海軍省の派遣団と、ザウホン提督とその参謀たち、カディコイ市参事会員に迎えられた。それから「エムデン」乗組員と他の人々は、トルコの駆逐艦に乗って、宮殿の突堤に向かった。そこで彼らを待っていたのは、ドイツ大使フォン・ヴァンゲンハイム男爵と大使館・総領事館の人々、国防大臣と内務大臣、陸軍元帥フォン・デア・ゴルツ・パシャ⁵、ドイツの駐在武官と海軍将校たちなどである。「エム

4 『外国新聞に見る日本』（毎日コミュニケーションズ、1989年）第1巻本編、504頁、1870年7月2日付「タイムズ」紙の記事で、ハラキリの慣習を取り上げた前年の議会での討論の様子が報告されており、切腹廃止が3対200で否決されたとある。この資料では、1890年にはそのような記事は見当たらない。

5 Colmar Freiherr von der Goltz-Pascha (1843-1916) ドイツの陸軍元帥でトル

デン」の乗組員は軍艦旗を掲げて駆逐艦の中甲板に立っていたが、この艦が近づくと、集まっていた観衆は言いようのない感激にとらえられた。トルコの儀仗兵たちが軍隊式表敬をおこなっているあいだに、『皇帝賛歌』⁶が演奏される中で上陸がなされた。メルテンス総領事が歓迎のあいさつを述べ、それから隊列が組まれた。トルコの軍楽隊が前を行進し、ミュッケ大尉を先頭にして「エムデン」の乗員が続いた。彼らの背筋を伸ばした姿勢は、観衆に非常に大きな感銘を与えた。公園や街路を歩いて行ったこのパレードは、まるで凱行進のようであった。それから乗組員たちは、しばらく居住することになるドイツの汽船「ゲネラル」に赴いた。明日の晩には、ガーデンパーティーが催される。

イタリア

ひとりの戦友がいた。
最悪の戦友だった。
太鼓が戦いを告げると
そいつはこっそりと去り、
味方じゃないと言った。

弾が飛んできた。
ははあ、お前の弾か。
ご立派な考えじゃないか。
俺のわき腹について
一稼ぎするつもりだな。

コ軍を指導し、メソポタミアのイギリス軍を破った。「パシャ」は、トルコの高官の称号。第三巻に関連記事あり。

6 当時のドイツ国歌

そうさせてなるものか。
お前にやるものはないぞ。
それでも取りにきたら
したたか殴ってやる。
ろくでなしの「戦友」め。

M. St.

イタリア軍について

『ノルトホイザー・ツァイトウング』紙より

ここ数十年間のイタリア軍唯一の注目すべき軍事行動であるリビア遠征⁷の成り行きからすれば、世界大戦の決定的な局面にイタリア軍が登場したとしても、向こう見ずの感はどうしてもぬぐえないだろう。多くの物資と兵員を失い、諸々の重大な欠陥や非常にお粗末な組織力があらわになったことが、疑わしい価値しか持たない勝利のための代償であった。

今までイタリア軍には、戦争準備のために9ヶ月の時間があつた。この準備は非常に熱心になされた。装備の在庫と馬の大きな不足を解消しておくことが重要であった。とりわけ、大砲と騎乗部隊の装備品の不足が深刻だった。イタリアの工場群は、どうひいき目に見てもこの穴を埋めるのに十分でなかったし、交戦中のヨーロッパ諸国からは何も得ることはできなかった。8月には、多くの将校からなる委員会がアメリカに行って、大砲関連の物資や革製品、馬を買った。もっとも、馬の購入についてはおあいにく様だった。多くが輸送中に死んでしまったからである。アメリカからの資材全体の調達がどれほどだったかは、概数すらわからない。いずれにせよ、軍備のための支出は莫大なものだ。一億リラが承認されたが、

⁷ 1911年から翌年にかけて、イタリアはトルコと戦って、トリポリを占領した。

実際にはその何倍もの出費だった。名目上 30 万人そこそこのわずかな平時兵力をもって、イタリア軍は数ヶ月前に戦争状態に入った。予備役兵は、かなり前からすでに大部分徴集されていた。そしてこの 1915 年には、1895 年生まれの 20 歳の若者たちが、時期を早めて 1 月 1 日に召集された。88 年から 93 年生まれまでの兵士の入隊によって、現有兵力は、5 月のはじめにすでに 60 万以上に達したであろう。この数はそうこうしている間にも、強力に推し進められて時折は秘密裡になされた召集によって、いっそう増加している。

イタリア軍は、平時において 12 個軍団と地方の 25 個師団、騎兵 3 個師団を有する。四つの兵監部に分かれている陸軍は、1914 年には歩兵

389 大隊、憲兵 12 部隊、騎兵 150 中隊、砲兵 263 中隊であった。これに多くの特殊部隊が加わる。平時において約 30 万人と 64,000 の馬匹などからなるこの軍は、戦時においては当然大幅に拡大される。というのも、常備軍以外に 50 万から 60 万の予備役兵と 30 万の後備役兵のための余地が作られることになるからだ。またこれに、ほとんど 200 万の在郷軍人 (ドイツの国民軍に相当) が加わる。結果として、イタリア軍の名目上の兵力は、国民軍を除いて 120 万以上になると評価できる。これらの数字の算定には、資料によって少なからぬ誤差があるだろう

イタリア軍の
戦時・平時兵
力の統計

平時兵力：
304,614 人



戦時兵力：
3,433,150 人



が、すべての数字は実際と比べて多めというよりも少なめに見積もられているであろう。

中欧諸国に対する作戦行動にとって特に重要なのは、アルプス部隊、山岳歩兵隊と山岳砲兵隊である。これらは、募兵のさいに北イタリアの山岳地方出身の選り抜きの人材を優先的に割り当てられているのだ。

編成されている全部隊と後備役兵は、マンリッヒ・ラルカナ 6.5 ミリ弾倉銃 G1 型を装備している。在郷軍は、旧式ではあるが改良されたヴェッテリ銃 78/87 を持っている。まだはっきりと記憶に残っているのは、リビア戦争のときに、イタリア軍の銃弾の口径が小さすぎることが証明されたということだ。なにしろ負傷したアラブ人が、平然と戦い続けることができたほどなのだ。この事実をとにかく記しておきたいが、それに期待しすぎてもいけない。野戦砲部隊の装備は、ここ数年で大いに進歩したが、規格が統一されていないのが悩みの種だ。約 100 個大隊はクルップ方式であり、別の同数の大隊はデポール 1911 方式である。どちらもフランス軍で用いられている口径 75 ミリの砲弾を使用する。それ以外の大隊は、最近の数ヶ月間にその一部の砲の新式砲への交代がうまくできていなければ、まだ旧式砲を持っているだろう。その他、大部分がクルップ製の榴弾砲がまだ豊富にある。

憲法によれば、最高指揮権を有するのは王である。しかし、王はすべての公的な仕事において控え目なので、実際の指揮権は参謀総長ルイジ・カドルナに委ねると予想される。彼は陸軍の信頼を得ている。この指導者は、イタリア側からの軍事行動を承認すると考えてよいだろう。カドルナは現在 65 歳である。現陸軍大臣ツッペリは、カドルナによって作られた人物⁸ — 悪い意味で言っているのではない — と言える。

イタリア軍総司令部の計画によって軍がどこまで出てくるのか、今のところどんな推測をしても無駄であろう。今のところわかっているのは、オー

8 「作られた人物」と訳した原語 *Kreatur* には、「被造物」という意味の他に、「腰巾着」などの意味もある。

ストリア国境のイタリア軍が軍備を整えているということだけだ。この国境に近い北部には、いくつかの要塞もあり、ヴェローナ、マントヴァ、レグナノ、ペシエラの諸都市がある。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 19 問解答

1. Sf3 - d4 任意に
2. D od. S ≠

第 20 問解答

1. Ld1 - b3+ Kd5 - c6
2. Lc3 - b4 Ke6 - b5
3. Da7 - b7 ≠

第 20 問 その他の解答

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. Kd5 - e4 | 1. Kd5 - d6 |
| 2. Da7 - f2 Ke4 - d3 | 2. Da7 - b6+ Kd6 - d7 |
| 3. Df2 - f3 詰み | 3. Lb3 - e6 詰み |
| 1. Da7 - a6 Kd5 - c5 | 1. Kd5 - e4 |
| 2. Ld1 - a4 Kc5 - d5 | 2. Da6 - c4 Ke4 - f5(e3) |
| 3. Da6 - c6 詰み | 3. Dc4 - g4 (e4) 詰み |

正解送付者：ヨーゼフ・ヴェーバー、H. ローデ

第 21 問

白：Kc8, Dg8, Lg3, Sf3, g6, Be7

黒：Kf6, Th 7, Lh 8

2 手詰め

第 22 問

白：Ke2, Dd7, Be7

黒：Schwarz: Kf7

3 手詰め。

『トクシマ・アンツアイガー』用ファイル

ここでもう一度、われわれのしゃれた当紙用ファイルについて紹介しよう。それは 50 銭で『トクシマ・アンツアイガー』の編集部から入手することができる。—同時に読者にお知らせしたいのは、われらの新聞の創刊号の復刻版が、きちんと仕上げられて出されるということである。これも編集部で 10 銭の値段で販売中。

最近のニュース

『ベルリン日刊新聞』に、次のような報告が載っている。

『オールドウルフ収容所新聞』⁹より。ハレからの情報による。

「オールドウルフ収容所に抑留されているフランス人捕虜たちは、ユーモアたっぷりに運命を耐え忍んでいるようだ。そのことは、少し前に創刊された彼らのフランス語機関紙『オールドウルフ収容所新聞』から推測できる。この新聞の表紙には楽しげな商標が描かれていて、その中で電線に二羽の鴉が止まって面白い格好で揺らしているのが特に目につく。この新聞の最

9 オールドウルフ (Ohdruf) はテューリンゲンヴァルト前地の Ohra 川沿いの町

新号の内容で誰にとっても興味深いのは、とりわけ次の事実である。オールドウルフのフランス人捕虜の中で、40 人のシンフォニー・オーケストラができたのだ。もっとも、このオーケストラのためにチェロとホルンの奏者がいまだに募集されてはいるが。このオーケストラは、収容所の中で毎週 2 回の公開コンサートをおこなう予定で、その収益は、戦争捕虜援助委員会のために役立てられることになっている。」

この記事からわかるのは、ドイツにつかまった捕虜たちも「収容所新聞」というものを出していて、われわれと同じようなやり方で暇つぶしをしているということだ。オールドウルフのフランス人は、(うれしいことに)数の上ではわれわれよりもはるかに多いから、オーケストラのメンバーを集めるのはずっと簡単だったはずだ。しかし、彼らの楽団がわれわれの楽団の成果に匹敵するとはとても思えない。われわれの楽団の方が小さいのはどうしようもないが、きっと洗練されているだろう。



イギリス特集

めざした目標



議会で。さあ、
ベルリンへ進撃だ。

結果は



ベルリンでドイツ軍に
警護されて。

おおイギリスよ

おおイギリスよ、イギリスよ。
おまえは世界中に火をつける。
おまえが奸計をめぐらして
諸国民に贈り物をするとき。
だから真実を知る者は憎むのだ、
おまえ、イギリスを。

おまえは諸国民の安らぎと平和を
さまたげ、全人類を戦わせる。
いずれわかるにちがいない。
おまえのもくろみが悪巧みだと。
だが、今でもみんな知っている。
おまえ、イギリスを。

おまえが歩む
おまえは
おまえが何を
それはすべて
だからまもなく
おまえ、

のは血と屍の道だ。
友情に裏切りで報いる。
くわだてようと、
偽善ばかりだ。
神は罰するだろう、
イギリスを。



真実、正義
自由
ドイツ

虚偽、羨望
嫉妬
イギリス

おれは誰かって？



おれはトミー・アトキンス。律儀で無骨な田舎者だ。
ロシア人はお得意さんで、フランス人は無二の相棒。

シーク教徒やグルカ兵と兄弟みたいにひとつのテントで暮らす。
アルジェリア土民や黒人、植民地の有色人兵や世界中の者たちとも。

おれたちの教養と道徳には、だれもがこぞって感心する。
かくておれたち道学者は、ドイツのライン川に文化をもたらす。

ドイツ人をやっつける方法

キッチナー卿¹⁰には兵士たちが必要だ。

だが、彼らは無事ではいられなかった。

最上の兵士たちは、進むにつれて

次から次へと斃れていったので。

まだ残っている兵士は多くない。

卿はこれでは目的を達せられない。

ポスターを貼り、美辞麗句を連ねて

卿は新兵の勧誘をせっせとおこなう。

すると、卿の陸軍になだれ込むのは

有象無象のごろつきどもだ。

このあいだ、卿はパレードを催した。

今いる兵隊を見せよう

この閲兵は悲しい

観客が皆ぞっと

卿は言った。

ドイツ人たちは、

まいってし

というのだ。

ことに中止になった。

してしまったから。

「よくわかったぞ。

諸君を見るだけで

もうに

ちがない。」



10 大戦初期のイギリスの陸相。カリスマ的人物で、彼がこちらを指さし、「祖国は君を必要としている (Your country needs you.)」と言っているポスターが有名となった。1916 年 6 月、乗っていた船が潜水艦に撃沈されて死んだ。